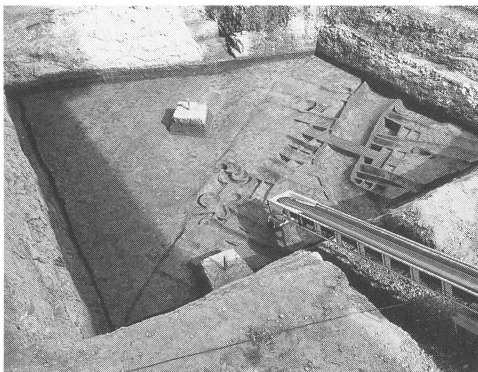


つき なわ て 遺 跡
月 縄 手

調査の経過 月縄手遺跡は、名古屋市西区比良地内に所在し、名古屋市北西部を流れる庄内川右岸の微高地上に位置している。名古屋環状2号線(国道302号)の橋脚建設に先立ち、昭和62年に発掘調査が行われ、古墳時代前期の遺構と、さらにその下層で弥生時代前期にさかのぼる遺構面が確認されている。今年度は国道302号拡幅にともなう事前調査として、311㎡(A・B・C区)の発掘調査を実施した。(鷺見 豊)

上面(古墳時代前期)の遺構 62A区をはさんで西と東に設定した92A・B区(以下、単にA・B区と記す)では複雑に重複して掘削された溝を、92C区では溝と土坑を検出した。

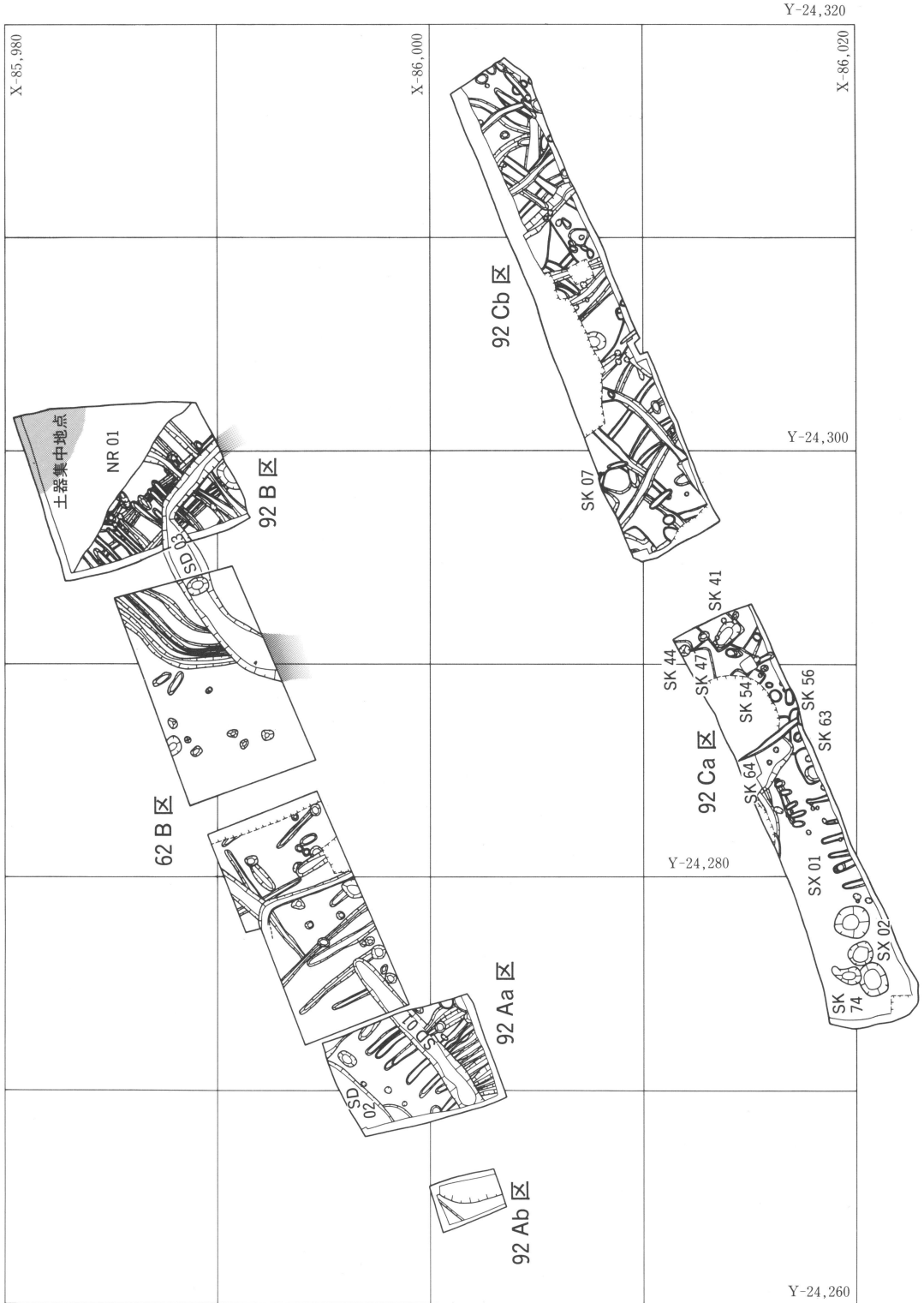
A区は調査の都合上Aa区とAb区にわけている。Aa区では北東から南西にのびる溝(SD01)とその北側に平行する溝(SD02)、これらと直交する小溝多数がみついている。このうち、SD01は62B区で検出されたSD19の西延長部分にあたる。Ab区ではAa区のSD02の西側の肩を確認した。このSD02は後述する弥生前期環濠SD101が完全に埋没し切らなかったために形成されたくぼみである。B区では調査区の北西隅から南東隅に対角線状にはしる緩やかな崖面があり、その東側は谷状の落ち込みとなっている(NR01)。NR01からは廻間Ⅲ式を主体とする土器数点が集中して出土している。調査区西側ではAa区と同じ方位をもつ小溝が重複して掘削されている。そして、これらの溝をすべて切るかたちでL字に折れ曲がる溝SD03を検出した。これは62B区のSD03とつながり、コの字状になる。方墳の周溝と考えられる。C区もA区同様Ca・Cbと2つの調査区にわけて調査をおこなった。Ca区では西端部で大量の土器が集中して出土した。特にSX01・02、SK74からはやはり廻間Ⅲ式を主体としたきわめて良好な一括資料が得られた。SX02からは木製農耕具の膝柄鍬も出土している。調査区東半部でみつかったSK41・44・47・48・54・56・63・64は竪穴住居跡である可能性が高い。Cb区ではA・B区とほぼ同じ方位をもつ小溝が複雑に重複して掘削されている。



B区全景



SX02遺物出土状況



上面遺構図 (古墳時代前期) (1 : 300)

下面（弥生時代前期）の遺構 古墳前期のベースである淡灰色シルト層が約30cmあり、その下で弥生前期の遺構面が確認されている。この前期の遺構でまず特筆すべきは、A a・A b区からC a区西端部につながる溝S D101である。規模は幅約4 m、深さ約1.5 m、断面は逆台形で、集落の周囲にめぐらせた環濠であろう。C a区では環濠に接して長楕円形の土坑S K141がある。ここからはほぼ完形の遠賀川系壺（写真）を含む多くの土器が出土した。また、S K109・126・127は竪穴住居跡の可能性があり、B区の自然流路N R101の西肩崖面や、C b区S K101・103・105・106・107・121、S D102などの遺構からも良好な資料が出土している。

まとめ 今回の調査により、月縄手遺跡に関してさまざまな新しい知見が得られた。

まず、遺跡の範囲がほぼ確定できるようになった。昭和62年度の調査における所見では62B区より北側が集落の中心にあたと想定されたが、今回の調査により、むしろ南側の92C区が遺跡のほぼ中央部である可能性が高くなった。遺跡の推定範囲は東西・南北とも70 m前後と考えられる。次に、上面遺構では古墳前期の土器が大量に出土したことである。特にCa区のS X01・02出土土器は廻間Ⅲ式後半の良好な一括資料であり、今後の土器編年の指標となり得る。最期に、下面遺構では弥生前期に属する環濠の検出があげられる。県内でこの時期の環濠が見つかった例は、尾張では高蔵遺跡（名古屋市）、山中遺跡（一宮市）、松河戸遺跡（春日井市）、三河では白石遺跡（豊橋市）などがあるが、月縄手遺跡の環濠はこれらのなかでも特に古い時期に属する。また、遺構出土の良好な土器群がこの時期の土器の研究に役立つこととなろう。

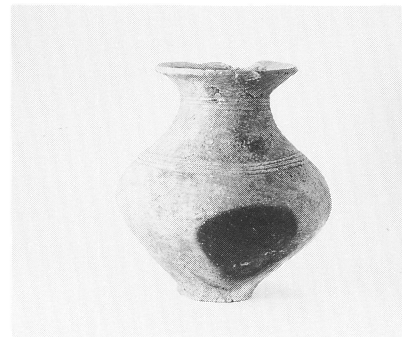
（樋上 昇）



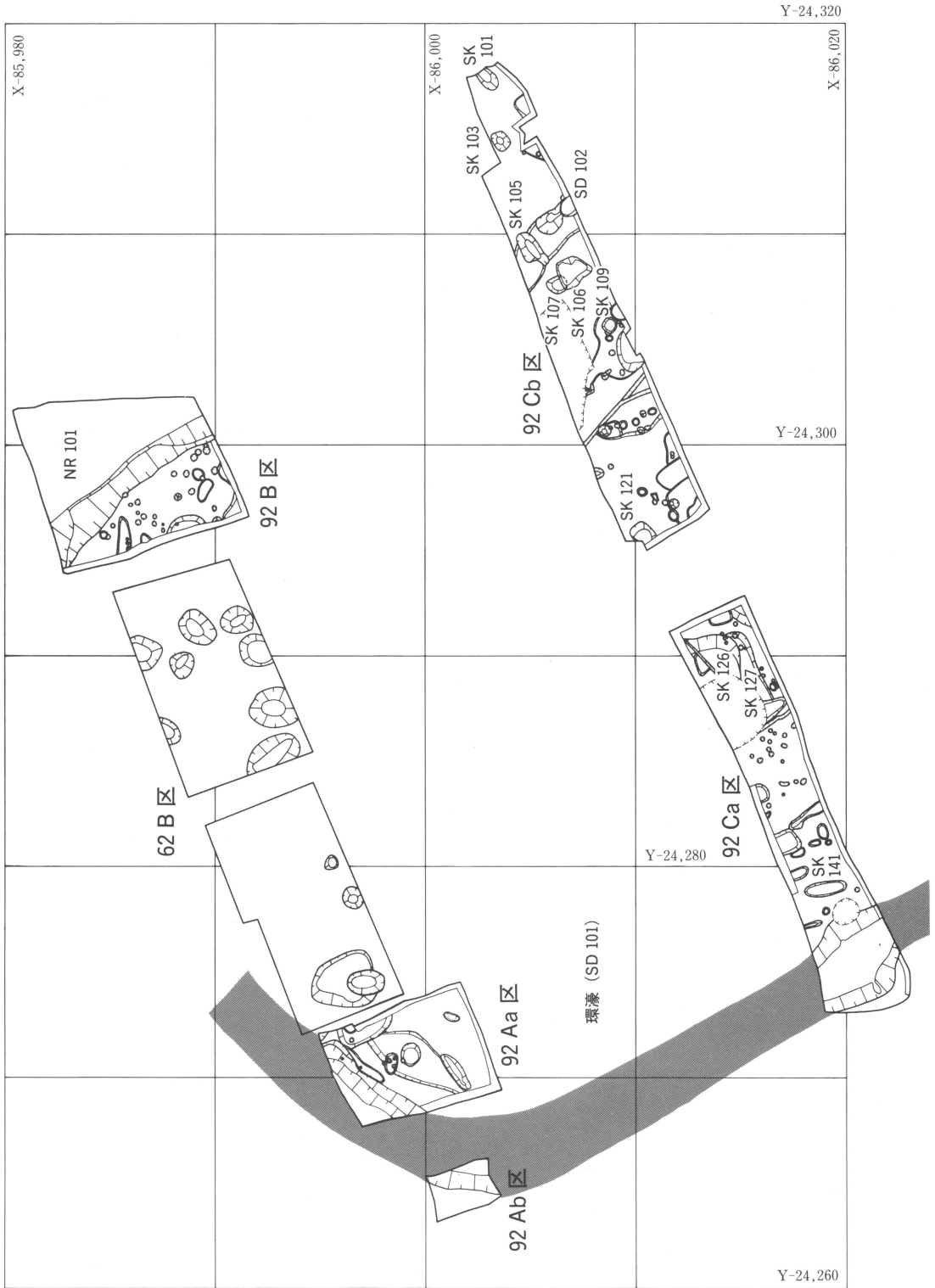
Ca区全景



環濠



S K141 出土弥生土器



下面遺構図 (弥生時代前期) (1 : 300)